

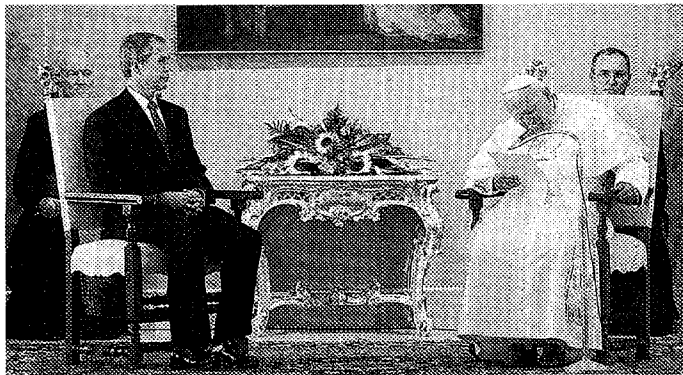
胚(受精卵)から採られ、様々な神経や臓器に分化していく能力を持つヒトES細胞(胚性幹細胞)は近い将来、難病治療などへの応用が期待される。一方、技術の暴走を防ぐシステム作りが論議されている。そんな中、仏教の生命観に立ち、研究と利用の方向付けを試みた鍋島直樹・龍谷大学助教授(真宗学)の論考が、ネット上の学会誌「宗教と倫理」第一号(宗教倫理学会編)に掲載された。

ES細胞については、「生命の萌芽」である胚をどこまで利用していいのかという倫理的問題、人間の「改良」への応用もあろうこと、キメラ(ヒトと動物の遺伝情報が混ざった生体)の誕生や、移植後の異常分化の恐れなどが指摘されている。

鍋島助教授は「科学技術それ自体は善でも悪でもない」が「人間の欲望は強く際限なく、常に過ちをおかすこと」を前提としたうえで、「利用を適切に進めるため、仏教の側から「縁起の生命倫理」を提起する。

これは、親鸞の「一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり」(「歎異抄」)、仏陀の「母が己がひとり子を命をかけて護るより……一切の生きと

## 「ヒトES細胞」研究 ネットに論考



ローマ法王(右)はローマを訪問したブッシュ米大統領(左)に「ES細胞研究反対」を伝えた(2001年7月、AP)

鍋島直樹・龍谷大助教授

# 「縁起の生命倫理」提起

しいけるものどもに対しても、無量の慈しみを起すべし」といった言葉を典拠とし、大乘仏教の教えから取り出される生命観だ。

その背景には、あらゆる存在が相互に支え合って生かされているという「万物一体」、自我を超えて他者に共感する「自我一如」の観念、生じたものは滅

するという無常の道理がある。人間存在を移ろいゆく時間の流れ、万物との関係性の中で見つめ直すことで、自己に役立つかどうかで他の生命をこらえる「我執的アプローチ」が戒められ、人間を他の動物に優越させる生命観も否定される。

こうした観点からES細胞利用を考えると、基本的態度とし

で、教義に沿って「反対」を宣言した大本教団のような例外があるものの、キリスト教系団体も含め、宗教の側からのES細胞に関する問題提起は低調だ。

米国での「キリスト教から賛成、反対意見が数え切れないほど出され、(ES細胞研究に慎重な)ブッシュ大統領のイデオログのような人も大勢いる」(小原克博・同志社大神学部助教授)という、良くも悪くも活発な動きとは対照的だ。これは科学と宗教の関係全般にいえる傾向だろう。

て▽有用性を基準に生命操作をしない▽未来の世代への責任ある行動▽他の生命との助け合い、などが要請される。具体的には、命の慈しみとしての難病治療に限定すること。さらに、「ヒトに限らず」あらゆる生命を治療し、保護するために「も活用する」。神の下での人間優位が明確なユダヤ・キリスト教的生命観からは出にくい発想だ。

◇ 進歩し続ける科学技術を独り歩きさせず、よりよい方向に導くために、わが国でもっと宗教の側からの発言が聞こえてきていいはずだ。(渡辺 達治)

わが国でわが国

宗教倫理学会のホームページ  
http://kohara.doshin  
a.ac.jp/jare